

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究（B）海外学術研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21401032

研究課題名（和文） グアム島所在の先史時代村落ハプト遺跡の学術研究調査

研究課題名（英文）

Archaeological research of the prehistoric Haputo village site in Guam

研究代表者

片岡 修 (KATAOKA OSAMU)

関西外国語大学・国際言語学部・教授

研究者番号：90269811

研究成果の概要（和文）：ミクロネシアのマリアナ諸島における先史時代を理解するために参照できる民族誌は欠落しており、1521年にグアムを訪島したマゼラン以降のスペインの航海士やキリスト教布教関係者らによる断片的な記録が存在するに過ぎない。第2次世界大戦の戦禍とその後の土地開発を免れたグアム島北西海岸に立地するハプト遺跡のラッテ期村落跡を対象とした本考古学研究調査は、先史時代のチャモロの空間利用に基づく生活様式と村落構造を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Apart from reference works of the 1521 Ferdinand Magellan expedition and limited resources provided by Spanish navigation crews and missionary priests thereafter, there is a significant absence of ethnographic literature pertaining to the prehistory of the Mariana Islands in Micronesia. Having survived largely unscathed the affects of World War II and consequent land development efforts, the prehistoric Haputo village site, located in the northwestern coast of Guam Island, remains as an invaluable archaeological source. Spatial analysis conducted in this archaeological research project provides evidence in achieving a better understanding of Chamorro prehistoric life patterns and village structures.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2010年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
2011年度	5,200,000	1,560,000	6,760,000
年度			
年度			
総計	13,200,000	3,960,000	17,160,000

研究分野：人文学B

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：ミクロネシア・マリアナ諸島・グアム島・ハプト遺跡・ラッテ期・ラッテストーン・uhm・midden

## 1. 研究開始当初の背景

グアム島に於ける考古学研究は、1921-22年のトンプソンによる高床式建造物の床下石柱群を構成するラッテストーン遺跡の発掘調査にはじまる(Thompson 1932)。その後、ホーンボステル (Gill 1924) は、床下に相当するラッテストーン間に墓が営まれていることを指摘し、八幡 (1940) がそれを検証し埋葬形態について詳細な分析を行った。

第二次世界大戦後、オズボーン (Osborne 1947) やスポアー (Spoehr 1957) やリード (Reed 1952) らは戦禍とその後の土地開発による破壊から免れた遺跡を保護する目的で遺跡分布調査を行ったが、図らずも多くの遺跡の消滅を確認する結果となった。

シカゴ自然史博物館のラインマン (Reinman 1977) は、1965-66年にグアム島南部の遺跡数と立地と形態を明らかにする目的で調査を実施し、紀元前 1320 年に溯るグアム島初の炭素測定年代を提示した。1967年と 68年にグアム島北部のタラギ遺跡の発掘を行ったレイ (Ray 1981) は、遺物組成からプレ・ラッテ期とラッテ期の不連続性が異なる文化によるものなのか、時期的変化によるものかを明らかにしようとしたが結論には至らなかった。

1980年半ばから 1990年にかけてタモン湾岸のホテルや内陸部のゴルフコース建設など土地開発に伴う緊急発掘調査が民間考古学研究機関により実施され多くの遺跡が消滅した。

以上の背景から、現在に至る発掘調査の多くは小規模な緊急調査であったため、墓跡やラッテストーンなど個々の遺構に基づく研究が展開され、村落の全体像を理解するための解決すべき問題が山積していた。

一方、ハプト遺跡は、第二次世界大戦の戦禍と以後の土地開発の影響を受けることなく、先史村落全体が保存され現在に至っている。その上、米海軍通信基地内に立地してい

るため、盗掘や破壊を免れてきたグアム島でも数少ない保存状態が良好な遺跡で、学術的に最も重要な遺跡の一つと考えた。しかし、遺跡が立地する入り江のビーチは、軍関係者の遊泳やピクニックなどレクリエーションの場として利用されており、表面散布遺物の移動や遺構の破損と破壊の影響が懸念されている。特に、当該地区は沖縄海兵隊の編成に伴い、2014年に人口の爆発的な増加が想定されている場所でもある。

本研究対象のハプト遺跡を含む周辺地域は、現地協力者の Olmo (2000) が 1998年に遺跡登録の目的で綿密な踏査を行っており、ラッテストーン遺構 23基、石臼 7点、大型井戸 3基、長方形石囲い遺構 2基、マウンド状遺構 2基を含む 38もの遺構を報告している。

グアム島では同様の遺跡が沿岸の入り江に沿って点在しており、本研究はそれらの遺跡の性格を明確にするだけでなく、マリアナ諸島に共通する先史文化や社会形成の理解に多大な貢献が期待された。したがって、本研究は遺跡の重要性を学術的に明確にするだけでなく、遺跡を含む周辺環境の今後の保全に大いに寄与するものと信じた。

## 2. 研究の目的

本研究は、ミクロネシアのグアム島北西沿岸の入り江に立地するハプト遺跡 (約 3万 m<sup>2</sup>) の考古学研究調査に基づき、プレ・ラッテ期 (紀元前 1500年～) からラッテ期 (紀元 1000年頃～西欧人接触時代) に至る長期間営まれたチャモロ人の先史時代村落の構造と生活様式を学際的に理解することを目的とした。

ラッテ期村落全体が保存されたハプト遺跡の研究により、村落形態、文化と社会の変化、資源利用と環境利用を含む生存戦略、他地域との交流関係など多くの問題を解決できる成果を期待した。また本研究成果が、共通文化が広がるマリアナ諸島全体を理解す

るためのメルクマールとなり、考古学研究を大きく進展させる契機となることを想定した。

### 3. 研究の方法

基本的には (1) 網羅的資料収集、(2) 研究代表者・研究分担者・現地協力者共同によるハプト遺跡の発掘調査と周辺地域の踏査、(3) 専門分野に基づく現地フィールドワーク、(4) 遺跡からの採集遺物の各研究者による分析と研究調査で構成した。

研究のベースと成る発掘調査では、遺構の組み合わせおよび各遺跡の空間利用（生産と製作活動、調理活動、埋葬など）を理解するため、以下の方法で研究を進めた。

#### ① 平成 21 年度：遺跡平面図作成

平板測量により遺跡全体の遺構平面図 (500:1) を作成し、GPS 測定を行った。

② 平成 22 年度：第 1 次発掘調査と遺物整理  
調査対象地域 (H-16) に 1 x 1m グリッドを設定。遺物の分布状況を理解する目的で、表面遺物をグリッドごとに採集し、ラッテストーンと調理場跡と焼土に 1 x 1m のテストユニットを設定した。

③ 平成 23 年度：第 2 次発掘調査と遺物整理  
本年度は研究成果報告書の作成を除き、前年度と同じ工程で村落最大の建造物跡 (H-31) の発掘調査を実施した。

### 4. 研究成果

#### (1) 平成 21 年度：ラッテ期村落の形態解明

Olmo (2000) の略測図を参考に遺跡と環境を含む周辺の詳細な踏査を実施し、遺跡全体の把握に努めた。マリアナ諸島のロタ島のモーチョン遺跡のように比較的村落全体が良好に保存された遺跡があるが、遺構の組み合わせを明確に示した遺跡平面図は存在しない。従って、遺構の組成を明記したハプト遺跡の平面図の意義は大きい。

約 3 万平方メートルの面積を有すハプト遺跡のラッテ期村落は、3 グループに分かれることが判明した。各グループには 4~5 棟のラッテストーンによる高床式住居が築造され、井戸を伴っていることを明確にした。各

ラッテハウスは、uhm (石囲いの調理場)、黒色土の midden (調理後の掻き出しや貝や魚骨や壊れた土器など不要品の廃棄による堆積)、安山岩あるいは石灰岩製の調理用石臼がセットになっている (図 1)。

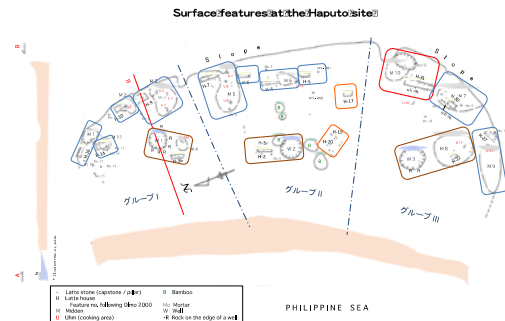


図 1 ハプト遺跡平面図

各井戸の隣接地には同様のセットをもつ住居が建設されており、井戸の管理に関わる人たちの居住地であった可能性を示した。また、村落中央に位置するグループ II に築かれた長軸を海側に向けた大型の建物跡は、村落共用のカヌーハウスの可能性を示唆した。遺構平面図は、ラッテハウス間に顕著な規模の差異が存在することを明らかにした。

身分差による建造物の規模の相違を検証する目的で、次年度の調査地点 (H-16 周辺) を決定した。

#### (2) 平成 22 年度：第 1 次発掘調査

村落北端 (グループ I) の 5 対のラッテストーンで構築された H-16 (2.5 x 9.2m) 周辺を発掘調査対象地とした。住居跡の南側には、uhm と長径約 10m の midden と石臼のセットを含む範囲に 1 x 1m のグリッドを設定し、分布状況の分析のためグリッドごとに遺物を採集した。また、住居跡の時期と床下の空間利用、uhm の構造と使用期間、midden の形成背景を理解する目的で、1 x 1m のテストユニットを設定した。炭素年代は、AD. 1330-1485 の時期に営まれた遺構であることを示した。

計量分析の結果、当然ながら表面採集遺物、とくに土器片の分布は調理との関連から midden と uhm に集中の傾向を示した。土器の

形態はグアム島内のラッテ期に共通した大型の丸底で、口縁が薄手と肥厚した厚手タイプの2種の土器が多量に採集された(図2)。

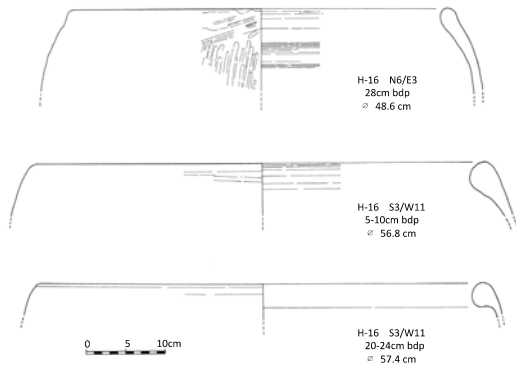


図2 典型的な土器口縁部

東側のラッテストーン列は土砂と岩石の二次堆積で発掘が困難なため、海側のラッテストーンに沿ってテストユニットを設定した。遺物の分布は、各ラッテストーンを中心に南寄りにシュモクアオリガイ (*Isognomon isognomon*) やニシキウズ科の仲間 (Trochidae) で漁具 (J型釣り針やトビウオ漁用釣り針や複合式釣り針)、シラナミ (*Tridacna maxima*) で貝斧、ウミギクガイ (*Spondylus* spp.) でビーズやペンダントなど装身具が製作されたことと、貝斧や剥片石器 (安山岩やチャート) で加工、ツキガイ製 (*Codaki tigerina*) 貝刃やタカラガイ製スクレーパー (Cypaeidae) で調理など多様な活動が行われたことが明らかになった。シラナミについては、多数の薄片と、使用による刃部が破損した貝斧が出土していることから、この場所で製作された貝斧で何かの加工に使用された可能性が高い。

各テストユニットから二枚貝のリウキユウサルボウ (*Anadara antiquata*) や巻き貝のネジマガキガイ (*Strombus gibberulus*)、魚ではベラ (Serranidae)、ブダイ (Scaridae)、ニザダイ (Acanthridae) などと土器片が出土していることから、様々な作業と共に飲食が行われた可能を示唆した (図3)。

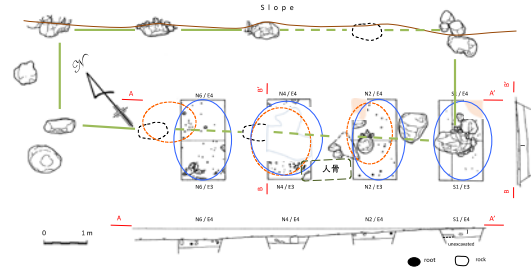


図3 H-16の遺物分布に基づく空間利用

植物遺存体の分析結果により、uhmからは食用植物の種子などの出土がほとんどなく、使用後に使用された石が掻き出され丁寧に清掃されていたことを明らかにした。

ラッテストーンの手前中央のテストユニットに散在した状態の人骨を検出し、次年度調査でテストユニットの掘り下げと拡張を行うことにした。

### (3) 平成23年度：第2次発掘調査

第1次発掘調査同様の方法で、グループIIIの6対のラッテストーンで構築された村落最大のH-31 (3.3 x 18.6m) とその周辺遺構を主な発掘調査の対象とした (写真1)。



写真1 H-31の全景

また、前年度の継続作業として、H-16検出の墓跡の詳細な調査を行った。人骨は、性別不明の3才児、新生児、20-22歳の男性で、壮年男性の歯には、ビートル・チューニングによる暗茶褐色のステインが認められた (写真2)。また、埋葬人骨の南側で検出された人骨溜まりでは、成人男性の大腿骨と脛骨が

欠落していた。マリアナ諸島に見られる人骨製槍先の製作に利用された可能性がある。



写真2 墓跡で検出された壮年男性の人骨

H-31 に付随する北側の midden の大きさは、建造物の規模に比例するかのように、H-16 のほぼ3倍に相当し直径が27mある。炭素年代は、H-31のラッテ期のAD. 1290-1440と、プレ・ラッテ期のAD. 70を示した。

南西隅のラッテストーン(L1)の海側に設定したテストユニットは他とは異なり、焼かれたものを含む散在した多数の人骨片と副葬品の可能性が高いウミギクガイ製ペンダントが出土した。

居住跡中央のテストユニットでは土器片やシャコガイ片が出土しているが、他に比べて出土遺物数が少ない。崖側のラッテストーンの中央3本のラッテストーン下に設定したテストユニットの出土遺物は、魚骨製編み針を除きH-16と比較的類似しており、同様の空間利用が行われたことが判明した(図4)。つまり、従来から述べられているように、建造物の規模の相違が身分差を反映するという考えを遺物によって立証するのは困難なことを再確認する結果となった。

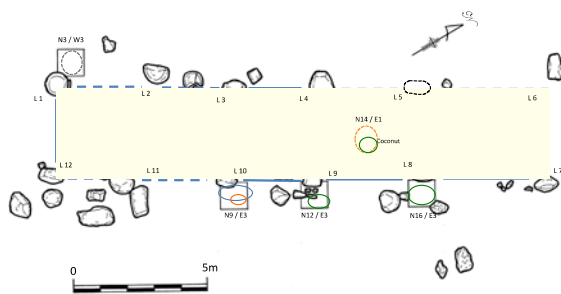


図4 H-31の遺物分布に基づく空間利用

#### (4) まとめ

ラッテストーンで構築された高床式住居の床下とその周辺は、漁具(釣り針)・工具(貝斧や石器)・装身具(ビーズやペンダント)の製作や、貝斧などの工具を使った加工作業場として多目的に使用され、それに伴う飲食が行われた可能性が高い。とくに、各ラッテストーンを中心に、外寄りに遺物の分布が広がっている。同時に埋葬地でもあったことと、埋葬人骨の必要部位が利用され、二次埋葬が行われたことを明らかにした。H-31の中央の比較的少ない遺物出土状況は、建物の床下中央は製作や加工作業とは異なる活動が行われていた可能性を示唆した。

炭素年代をみる限り、プレ・ラッテ期とラッテ期に大きな時期差があり、両者に継続性は認められなかった。

ハプト先史村落遺跡で最大規模の建物が身分高位者の住居あるいはメンズハウスかミーティングハウスのような特殊な建造物かを立証する遺物は出土していない。ただし、H-31周辺から太平洋の島々ではよく儀式と関連するウミガメの腹甲板片、身分高位者に献上される大型のコブダイの下部咽頭歯、middenから海洋魚の大型の椎骨が見つまっている。今後の課題としたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計4件)

①片岡修・Richard K. Olmo「グアム島ハプト遺跡に於けるラッテ期村落について」第29回日本オセアニア学会 2012年3月24日 倉敷芸文館

②山野ケン陽次郎・片岡修・Richard K. Olmo「グアム島ハプト先史時代村落遺跡出土の貝製品について」動物考古学研究会 2011年10月20日 名古屋大学

③片岡修・山野ケン陽次郎・Richard K. Olmo「グアム島米海軍通信基地内ハプト先史村落遺跡・第2次考古学調査」第22回天理考古学・民俗学談話会 2011年4月29日 天

理大学

④片岡修・Richard K. Olmo・竹中正巳・細谷葵「グアム島米海軍通信基地内ハプト先史村落遺跡・第1次考古学調査」第21回天理考古学・民俗学談話会 2010年5月10日 天理大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片岡 修 (KATAOKA OSAMU)  
関西外国語大学・国際言語学部・教授  
研究者番号：90269811

(2) 研究分担者

竹中 正巳 (TAKENAKA MASAMI)  
鹿児島女子短期大学・生活科学科・教授  
研究者番号：70264439

(3) 連携研究者

細谷 葵 (HOSOYA AOI)  
総合地球環境学研究所・研究部・研究員  
研究者番号：40455233